
目玉焼きには。

沙堂 瑠々亞

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

目玉焼きには。

【コード】

N5793A

【作者名】

沙堂 瑠々亞

【あらすじ】

朝起きたら、サークル仲間の部屋でした。アイツが飄々としてるのはナゼ!?

目玉焼きには。

目玉焼きには。

その日私は、充滿する朝の香りに促されて目を開けた。

挽きたてエスプレッソの匂い、香ばしく焼けるベーコンの油の匂い、焼きたてパンの小麦の匂い……朝は和食党の私が、久しく嗅ぎ取らなかつた食卓の風景だ。

ああ、炊き立て白米+高菜orたらこに一汁一菜なんて朝もいいけれど、こういう朝も一人暮らしにはありかなあ……なんて、まどろむ中で考える。

大学生活も二年目、一人暮らしの勝手も分かってきたし、バイトも余裕が出てきた。サークルだつて楽しいし、仲間同士で喋ってれば楽しいし、あとは彼氏さえいれば完璧なんだけど……うだうだした後で目を瞑る。さらさらした生地の枕が眠りに誘ってくれた。凸凹してて、タオルみたいに汗をすぐ吸い取ってくれそうな生地のこと……あれ、こんなさらさらした生地、家にあつたっけ？

ふと疑問に思つてもういちど目を開ける。頬を押し付けていたのは、ワツフル生地の枕カバーだった。

クリーム色なんて家にはない。枕を新調した覚えもない。というか、根本的にベッド自体ちがう！！

がばりと跳ね起きた私は 自身が置かれた状況に絶句した。

「……えっ……」

……なんで私キヤミソールのままなの。そんでもってなんでブラがなくて靴下履いたままなの。

つていうかさ、ここ、どこよ!?

「あ、起きたか」

その時、向こうから皿を両手に持つてきた相手と目が合った。

同じ専攻で同じサークルでもある真崎だ。え、なんでここに真崎が？

「昨日の酔い残ってないか？ いけるんだつたら朝メシ食えよ」

頭がモヤモヤする。昨日……そうだ、確か昨夜はサークルの飲み会だった。

先輩がパチで勝ったとかで奢ってやるとか言い出して 焼酎の一番高いやつだかなんだかを呑んでみよってことになって……ソーダ割りかロックで悩んで結局ロックにしたら案外度数が高くて……

「たいしたモンじゃないけど作ったからさ」

ちよつと待って、じゃあここは真崎ん家で、この格好ってことは、酔いつぶれてそのまま……!?

「なっ……ななな……」

「冗談じゃ……ないっ!!」

目 玉 焼 き に は 。

「変なこと……してないでしょうね!」

慌てて布団を上から被り、服の入ったカゴを抱えてユニットバスに直行。着替えてベッドに居座り、真崎を睨んだ。

ローテーブルの皿にパンを並べた真崎は、私の視線を受けた後、数秒経ってから顔をそむける。

「ちよつとちよつと! なんでそこでホホを染めるのっ」

「いや……だつてなあ……」

「恥じらいながらこっち見るのやめてよ! つーか見るなっ」

真崎はとつくのとうに着替えちゃってて、髪までセットしていた。後輩は「何気にカッコイイし優しいんですよね(はあと)」とかなんとか評してたっけ。私にしてみれば は?どこが? と返してやりたくなる。あんまり身長は高くないし、どこにだつていそつな顔だしヘタレっぽいし、しいて言えばゆっくりめの口調で周りの男子より穏やかに見えるだけじゃない。

目玉焼きには。

「こんな奴……こんな奴に私ときたら……っ！」

「……なんだ。覚えてないのか」
「残念そうに言わないでっつてば！ 何があったかなんて……あったかなんて想像したくもないわよバカっ」

怒鳴ったら泣きなくなってきた。頭がちよつとがんがんする。酒を飲んでて記憶がなくなつたなんて、凹む出来事だ。

外から子供たちのはしゃぐ声が聞こえてきた。ああ、今の状況とすごいミスマツチ。

「何もしてねえって。寝込み襲うかよバカ」

カラダに異変ないことぐらい自分で分かるだろ。

言いながら真崎がコーヒーマグカップにトポトポと注ぐ。挽きたての香りが広がった。

無垢な白いカップが二つ………そういえば真崎はちゃんと朝食を二人分、私より先に起きて作っておいてくれたのだった。

「飲み会終わった後、先輩が二次会やるとか言い出したんだよ。その場にいたメンバーにお前も入ってたの。場所はオレの城、酔いつぶれてどうしようもなくなつたお前を 誰も引き取りはしなかつた、と」

「そんなあ……」

記憶の中では、個室でわあわあ騒いだということしかない。今にして思えば、それが真崎のアパートだったということか。

けれど万が一ということもある。私はベッドから立ち上がって詰りめ寄った。

「……でも体に異変がなくなつたって一応聞いときたいの！ ホントに何もしてない!？」

「してねえって」

「ホントにホント!？」

「………少し揉んだ」

「もっ………もっ……」

「朝方寝苦しそうだったからホック外したんだよ。そしたら………見

えたから」

「……………もむって……………バツ……………」

「なんだよ正直に話しただろ！ 目の前にあつたらなあ誰だって…

…」

「バカー……………バカー……………」

ばさはさはさ〜と、近くで鳥たちが梢から避難していった。

ああ、もう一生の不覚。ていうかなんで寝苦しそうだからって外すのよ。服は自分で無意識に脱ぐとしても、キャミからは剥ぎ取らないでしょうが！ しかも揉んだってなに！？ 見えたってなに！？

「……………そう怒るなよ。ほら、機嫌直してとつとと食えって」

カタリと皿を並べる音がして、私はローテーブルに目を向けた。

綺麗に真ん丸い黄身と、楕円に広がった白身がお目見えする。皿に盛り付けられていたのは、ベーコン焼きと目玉焼きだった。

「ご丁寧に 容器に移し替えないペットボトル2本をテーブルに置いて、真崎は言う。

「目玉焼きってしょう油とソース、お前どっち派？ オレ 塩コシ

ヨウ派だけど」

「ケチャップ」

「はあ??」

「目玉焼きには私ケチャップ派なの！ さっさと取りに行くっ」

お前なあ、なんて言いながら、真崎は冷蔵庫からケチャップを取りに行ってくれた。

心の中で少しだけ詫びる。転がり込んだのは私だけでも、こう喧々としていないと、真崎相手に何も言えなくなっちゃいそう。

とりあえず、顔が赤いのも朝食の湯気のせいにしておこう。

だって私たち、まだサークル仲間で、なにも起きていないんだから。

出された割り箸をぱきと割って、私はほこほこと香る朝食らを

目玉焼きには。

目玉焼きには。

前に声を上げた。
「いただきますっ」

H A P P Y E N D ?

(後書き)

目玉焼きよりも玉子焼き派な作者が書きました。

こついうのも好きな作者が書きました。

息抜きにユルく楽しんでいただければ嬉しいです。

目玉焼きには。

目玉焼きには。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5793a/>

目玉焼きには。

2009年2月17日08時09分発行